

題目：帰納的推論としての規範の獲得—生成モデル・識別モデルを用いた実証的検討—

氏名：喜多 敏正

指導教員：竹澤 正哲

## 本論文の要旨

本研究は、ルールを学習するメカニズムが、言語を学習する場合と規範を学習する場合と同じであるかどうかを、機械学習における生成モデル・識別モデルを用いて実証的に示した研究である。言語学における先行研究では、生成モデルと識別モデル、それぞれに対応した学習を人々がおこなうことが予測される状況を設定し、人々に人工言語を学習させたところ、非呈示文に対して、生成状況では「間違っている」、識別状況では「正しい」という異なる判断が下されることが示された。一方で、社会規範は、ルールであるという点では文法と同じである。また、道徳性の獲得を言語の獲得のアナロジーとして捉えた研究も存在する。以上の点を踏まえて、本研究では、同様の状況で、人々に規範を学習させた場合においても、非呈示の事例に対して異なる判断が下されるであろうという仮説を、先行研究の追試も含めて検証した。結果、言語での追試は成功したが、本研究の仮説は支持されなかった。すなわち、規範学習では人々が生成状況、識別状況のいずれにおいても非呈示の事例を「正しい」と判断する参加者が多かった。この結果は、言語を学習する場合と規範を学習する場合とでは、人々が異なる学習方略を用いているという可能性を示唆する。しかしながら、参加者の実際の成績を比べてみると、とりわけ、呈示回数が少なく難しいと思われる負の事例の問題において、規範を学習した参加者の成績が低かった。そのため、本研究の結果は、単に規範条件では学習の困難度が高く、それゆえ引き起こされたものである可能性がある。しかしながら、学習の困難度の影響が少ないとされる成績上位者の結果のみをみても同様の結果を得ることができた。この他に、規範学習の条件では、負の事例に注目して正誤を学習した参加者が多く、また全条件を通じて、参加者は非呈示の事例を、注目している側と反対の事例であると判断する傾向が示された。本研究には、規範と言語とでは人々の学習方略が異なる可能性を示した点で、大きな意義がある。今後は、言語学習と規範学習の間で得られた異なる結果が、単に学習の困難度によるものであったか否かを突き止める必要がある。また、正負の事例のうちどちらに注目して学習したか、などのさまざまな要因が、2つのモデルの予測とどう関連するのか、実際の参加者の判断にどのような影響を与えているのか、について詳細に検討していく必要がある。